06-00
C1
75

研究報告書第２号

E14-01

小学校における
学級外教員の職務に関する研究

F2-05

昭和50年4月

山形県教育センター

06-00
C1
75

資料整理カード　F 2 − 0 5

昭和５０年４月刊

小学校における学級外教員の職務についての研究

山形県教育センター

目　　次

Ⅰ　研　究　の　意　図
Ⅱ　研　究　の　ね　ら　い
Ⅲ　調　査　の　内　容　と　方　法
　1.　調査研究の視点
　2.　調査の対象と方法
Ⅳ　調　査　の　結　果　と　考　察
　1.　学級外教員の職務上の位置づけ
　2.　学級外教員の充実感について
　3.　学級外教員と他の教員とのかかわりあいについて
　4.　望ましい学級外教員の位置づけについて
Ⅴ　む　す　び

研　究　の　概　要

Ⅰ　研究の意図

本県の公立小学校の半数以上の学校に、その学校の規模に応じて学級数外教員が配置されている。そして学級外教員としてそれぞれの職務を分担している。学級外教員の職務は学校長の責任においてその学校の経営方針により位置づけられているので、学校によってまちまちである。そしてその職務内容によっても学級外教員の充実感がちがうのでないかと考えられる。したがって、学校教育効率化の面から学級外教員の望ましい職務はどうあればよいかを探求する基礎資料としたい。

Ⅱ　研究のねらい

学級外教員のおかれている小学校を対象として、つぎのようなことを明らかにして望ましい学級外教員の職務のあり方を探求する基礎資料にする。

1. 学級外教員の性別、年齢構成がどうなっているかを明らかにする。
2. 学級外教員の職務上の位置づけがどうなっているかを明らかにする。
3. 学級外教員の職務に対する充実感はどうなっているかを明らかにする。
4. 学級外教員と他の教員との人間関係はどうなっているかを明らかにする。

Ⅲ　調査結果の概要

1. 学級外教員の性別、年齢構成では、男子教員の方が多く、比較的高年齢層の教員が多い。
2. 学級外教員の職務上の位置づけでは、男子教員は主任格として、女子教員は教科担任としての位置づけがもっとも多い。学校運営が円滑にいくようにという理由からである。
3. 学級外教員の充実感では、学校長の見方としては充実感をもって職務に従事しているのでないかという評価をしているのに対し、学級外教員自身の充実感はあまりないという回答である。とくに女子教員は充実感がうすいと答えている。そのために学級外教員をやってみたいという教員は、男子教員の少数を除いては殆んどいないと言ってよい。学級外教員の職務分担が不明確であることと、専門性が生かされず、突発的な補欠授業や、雑用的な校務に追いまわされて多忙だからの理由である。
4. 他の教員との人間関係については、学級外教員の選定の際人柄が考慮されているので別に問題はないようである。
5. 望ましい学級外教員のあり方は、①教師の専門性を生かし、充実感をもたせる。②教授組織の改善を図り、教科担任制を実施し、児童の学習効果を高める、という方向で、教科担任か専科教員としての位置づけをすることがよいのではないかと考えられる。

　但し、この際問題となることは、教科担任や専科教員として位置づけるにふさわしい職員構成に恵まれることが条件といえる。

はしがき

最近、「学校経営の最適化」ということがいわれるようになった。「最適化」ということは、国語的な意味でなく「選ぶ」という意味内容である。ある目的があって、その目的達成のために数ある方法の中から、これを選んだほうがよいというように「選ぶ」ことである。方法的にどれをとっても適当であるが、その中でも最も適したものを選ぶという考え方、方法が最適化の考え方、手法であるといわれている。

自分の学校の教育目標を、どうしたら効果的に達成できるかということを考えるとき、「どうしたら」ということを科学的に行なうことが最適化につながる。現在とられている方法を他のものに置き換える場合、客観的な基準がなくてはどちらがよいか選びようがない。これをもっと科学的、客観的にやれないかと考えることが学校経営を近代化することであり、学校経営をより効果的にしていく方法であり、そのひとつが最適化といわれている。

現在、山形県の公立小学校には、分校を含めた7学級以上の学校を主体として学級規模に応じた学級数外教員が配置されている。これは学校経営がより効果的に経営できるようにという県教委の配慮からである。しかし、学級数外教員の職務については、その学校の校長に任せられ、校長の責任において試みられているのが現状である。従ってその教員の職務内容は学校によってまちまちで、学校経営上からみてかなりの問題があるのでないかと思われる。そこで、学級外教員の年齢、性別の構成、学級外教員の職務上の位置づけ、学級外教員の充実感の問題等々学級外教員の職務の実態を調査し、望ましい学級外教員の職務上の位置づけはどうあればよいかを探求する基礎資料になればと考えている。

調査にあたって、調査項目の不備な点もあったので十分な基礎資料を得ることができなかったが、多くの方々のご批判をいただければ幸いと思う。

この研究をすすめるにあたって、調査にご協力くださった県下の該当小学校の方々に深く感謝の意を表します。

この調査研究は昭和４９年度に実施しまとめたものである。

昭和５０年４月

山形県教育センター所長
蜂　屋　英　夫

目　　次

Ⅰ　研究の意図 …… 1

Ⅱ　研究のねらい …… 1

Ⅲ　調査の内容と方法 …… 2

1.　調査研究の視点 …… 2

2.　調査の対象と方法 …… 2

Ⅳ　調査の結果と考察 …… 3

1.　学級外教員の職務上の位置づけ …… 3

2.　学級外教員の充実感について …… 8

3.　学級外教員と他の教員とのかかわりあい …… 16

4.　望ましい学級外教員の位置づけについて …… 22

Ⅴ　む　す　び …… 30

1.　学校教育の効率化 …… 30

2.　学級外教員の充実感 …… 30

3.　反省と残された問題 …… 31

研究担当者
佐　藤　英　男

Ⅰ　研　究　の　意　図

本県の公立小学校は昭和４９年５月現在で３５７校あるが、そのうちの２００校以上の学校に学校規定により学級数外の教員が配置されている。即ち７学級～１５学級の学校には１名、１６学級～３３学級の学校には２名、３４学級～４３学級の学校に３名、４４学級以上の学校には４名という割合で、その外に６学級の学校で分校を持っている学校にも学級数外教員が配置されている。これは、学校経営上に支障がないようにという県教委の配慮からである。学校経営の目標は所与の条件を効率的に活用し、より学校教育効果をあげる　ということにある。従って、学級数外教員が配置されている学校では、その教員の職務をどのように位置づけて役割分担を果たしてもらうことがその学校の教育効果を高めることになるのか。ここで研究主題として取り上げ、研究しようとしている対象は、学級数外教員１名以上配置されている学校の学級外教員が、どのような職務を遂行しているのかについて研究を進めてみたいと考えている。

現在、学級外教員の職務については、学校長に任せられ、校長の責任において試みられているのが殆んどである。従ってその職務内容は学校によってまちまちで、学校運営上からみてかなりの問題があるのでないかと思われる。

第１には学級外教員の年齢や性別の構成である。第２には学級外教員の職務上の位置づけの問題である。第３には学級外教員の充実感の問題である。第４には学級外教員と学級担任教員との人間的なかかわり合いの問題であり、さらに第５には学校経営上からみて学級外教員の望ましい職務の在り方を探求することも重要な課題だと思われる。本県には、まだ学級外教員に関する包括的な基礎資料が整備されていないので、この調査研究をとおして整備をはかるのも意義あると思う。

Ⅱ　研　究　の　ね　ら　い

学級外教員のおかれている小学校を対象として、つぎのようなことを明らかにする。

1. 学級外教員の性別、年齢構成がどうなっているかを明らかにする。
2. 学級外教員の職務上の位置づけがどうなっているかを明らかにする。
3. 学級外教員の職務に対する充実感はどうなっているかを明らかにする。
4. 望ましい学級外教員の職務のあり方を探求する基礎資料にしたい。

Ⅲ 調査の内容と方法

1. 調査研究の視点

(1) 学級外教員の性別、年齢構成はどうなっているか。

(2) 学級外教員の位置づけがどのような経営方針でなされているか。

(3) 学級外教員の職務の位置づけはどうなっているか。

(4) 学級外教員は現在の職務に充実感をもって勤務しているか。

(5) 学級担任教員と学級外教員との人間的なかかわり合いがどうなっているか。

(6) 学級外教員がいることにより学校経営上どんな効果が表われているか。

(7) 学級外教員の望ましい職務はどうあればよいか。

2. 調査の対象と方法

(1) 調査の対象

ア 学校長……学級外教員のいる小学校長全員を原則とした。（回収数１８８名）

イ 学級外教員……小学校の学級外教員全員を原則とした。

（回収数男子１８４名　女子６８名　計２５２名）

ウ 学級担任教員……学級外教員のいる小学校で、その学校の学級外教員と同数の学級担任教員（回収数男子１２４名　女子１２８名　計２５２名）

エ 回答してくれた学校の規模別は下記のとおりである。

学級外教員１名の学校　１３８校　……小規模校として取り扱う

〃　２名の学校　４２校　……中規模校として取り扱う

〃　３名の学校　７校
〃　４名の学校　２校　……大規模校として取り扱う

オ 調査対象校は山形県教育庁企画調査課編「山形県学校名鑑」（昭和４９・５・１現在）によって該当校を選んだが、都合により対象校より除外した学校も若干あったことを付記しておく。

カ 回収率は事情により省略させていただく。

(2) 調査の方法

ア 質問紙法をとり、学校長に一括送付して依頼し学級外教員、学級担任教員には無記名でそれぞれ厳封の上回答してもらった。

イ 不備な点については学校を訪問して面接調査をした。

面接調査数

規模別＼地域別	村山	最上	置賜	庄内	計
小　規　模　校	2	1	1	2	6
中　〃	1	1	1	1	4
大　〃	2		2	1	5
計	5	2	4	4	15

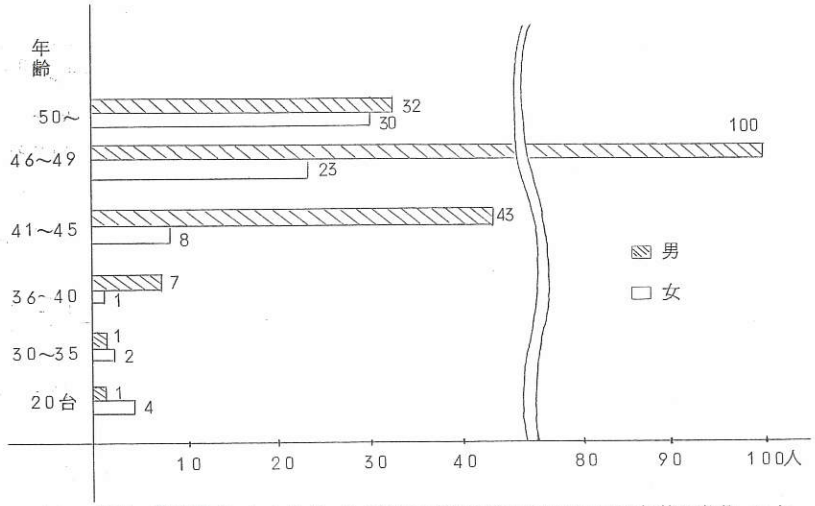
Ⅳ 調査の結果と考察

1. 学級外教員の職務上の位置づけ

(1) 学級外教員の年齢と性別の構成はどうなっているか。

ア 学級外教員として位置づけられている教員は、その学校でも高年齢で経験も豊かな高年齢層の教員が選ばれているのではないかと予想されたが、図１でもわかるように必ずしも高年齢者でなく、若い教員も学級外教員として選ばれている。

図１　学級外教員の年齢と性別　（人数）



これは、学校の職員構成にもよるが、その学校の経営方針や年度の重点目標等を考慮した上で教員の特性を生かす方向で位置づけをしていると考えられる。

イ 現在の小学校の実態からして男子教員に対して、女子教員の数が一般的に多いことから学級外教員も女子教員の方が多いのでないかと考えられたが、これも予想に反して男子教員の方が３：１とはるかに多い。このことについて面接調査した結果、①年度当初校務分掌を決めるに際して学級外教員の希望をとるが、女子教員で学級外教員を希望するものは殆んどいないので自然男子教員になってしまう。②学級外教員として校内全般についての仕事をしてもらったり、教科担任として他学級に出向いて指導をしてもらうにしても男子教員の方が指導力があり、弾力性もあるので適任であるという学校長の話であった。

ウ ２０歳台から３０歳台の学級外教員で男子教員の数よりも女子教員の数が多いのは、音楽の専科教員として位置づけられている教員である。

エ　４６歳から４９歳までの男子の学級外教員がもっとも多いのは、この年齢層の教員数が多いというだけでなく、この年齢層の教員が現在どこの学校でも学校運営上中心的な役割を果たしているといえる。

(2)　学級外教員の学校としての位置づけ１８８校について学校としての位置づけがどうなっているかについて調査したのが表１である。

ア　全体的に約６５％が主任格としての位置づけがされている。主任格の教員も学級を担任しているほうが子どもの実態がつかめて指導上好都合であるといわれているが、直接学級を担任すると時間的な余裕もなくいろいろたいへんであるので、学級外にあって指導力を十分発揮してもらいたいという意図からであろう。しかし主任格だからといって全然授業を担当していない教員はいないようである。教科担任として、あるいは補欠授業要員として兼務しているのが実態である。

表１　学級外教員の学校としての位置づけ　　実数（％）

規模別	大	中	小	計
①専科教員として	4（44.4）	10（23.3）	25（18.4）	39（20.7）
②事務補助として	0	0	5（3.7）	5（2.7）
③補欠授業要員として	0	1（3.3）	6（4.4）	7（3.7）
④組織機構上の主任格として	4（44.4）	30（69.8）	88（64.7）	122（64.9）
⑤教科担任として	1（11.1）	2（4.6）	11（8.1）	14（7.4）
⑥ＰＴＡや諸団体の渉外係として	0	0	0	0
⑦その他	0	0	1（0.7）	1（0.5）

イ　小、中規模校ほど主任格としての位置づけの数値が高く、大規模校ほど低くなっているがその反面、専科教員や教科担任としての位置づけが高くなっている。小、中規模校は学級数外として加配されている教員が１～２名と数が少ないので学級外教員とし、専ら主任として活躍してもらった方が学校経営上効率的であるという考え方であろう。大規模校では、定数外が３～４名という数であるので主任としての位置づけよりも専科教員や教科担任としての位置づけが学校教育の効率化の面からプラスであると考えられるからであろう。

ウ　現在の学校事情から事務補助と補欠要員としての位置づけが高いのでないかという予想のもとに調査してみたが、結果としては、これ等の位置づけはわずか７％弱と低い数値であることは予想外であった。教師の専門性を生かす観点からは当然といえよう。しかし、小規模校にわずかの数値がみられることは、事務職員が配置されていないこと。１学年１学級という学校では、学級担任が休暇や出張研修等で留守になる場合の補欠授業も満足に組めないので、子どもの学習効果が低下するのではないかと心配されることから事務補助や補欠要員としての位置づけをしているのだと察知できる。

(3)　学級外教員の主な職務

学校としての学級外教員の位置づけは(2)で述べてあるが学級外教員ひとりひとりの主な職務はどうなっているのか。これについて調査した結果が表２である。職務内容は各学校によって多種多様に分類できるので、どこの学校でも一般的に考えられている項目について調査した。したがって、職務内容の調査項目としては不十分であると思うが、一応の傾向はつかめるのではないかと考えられる。

表２　学級外教員の主な職務　　実数（％）　　下段の数は兼務の場合

性別＼職務別	教務主任	研究主任	給食主任	教科主任	図書主任	視聴覚主任	保健主事	教科担任	補欠要員	渉外係	事務補助	その他	計
男	129	7	1	12	0	2	5	18	5	0	1	4	184
	(70.1)	(3.8)		(6.5)			(2.7)	(9.8)	(2.7)			(2.2)	
	130	40	1	25	1	9	21	58	40	6	5	13	349
女	3	2	24	5	1	1	1	23	7	0	1	0	68
	(44)		(35.3)	(7.4)				(33.8)	(10.3)				
	3	2	32	16	4	1	1	36	25	4	4	4	132
計	132	9	25	17	1	3	6	41	12	0	2	4	252
	(52.4)	(3.6)	(9.9)	(6.7)			(2.4)	(16.3)	(4.8)			(1.9)	
	133	42	33	41	5	10	22	94	65	10	9	17	481

ア　男子の学級外教員１８４名中１５６名（８４.８％）がなんらかの主任としての職務を担当しているが、その中でも教務主任としての職務が圧倒的に多い。どこの学校でも運営機構上必要視されている結果である。学級外として全般的な視野に立って指導力を発揮してもらいたいという意図であろう。そのために教務主任を兼務する教員は殆んどなく、その外の主任や、職務は兼務が多い。

イ　女子の学級外教員６８名中２４名（３５.３％）は給食主任としての職務を担当しているが、学級外教員として給食の仕事を担当しなければならないほど給食の仕事の負担が大きいといえる。このことは学校経営上今後の課題として論議をよぶことになろう。

ウ　教務主任としての職務が男子の学級外教員中７０.１％と高く、女子ではわずかに４.４％と低い。反面、給食主任の女子３５.３％、教科担任の女子３３.８％、補欠要員の女子１０.３％と高い数値がでているのは男女の性別からくる職能を勘案してのことか。

エ　小・中規模の教務主任は、研究主任、教科担任、補欠要員と兼務が多く、職務内容が複雑である。これは教員数も学級外教員数も少ないためにひとりの教員に負担が大きくかかるのでないかと思われる。

(4)　位置づけの理由

学級外教員の職務を決定するにあたって、学校経営上の方針を先に決めて、それに合わせて後から学級外教員を選定し職務を決める場合と、先ず学級外教員を決めてから、学校経営上の方針に合うようにその教員の職務を決める場合も考えられる。また、学級外教員を希望する教員がいないため、その学校の伝統や慣習に従ったり、職員構成に左右されたり、いろいろな問題があるようだ。表３は、学級外教員の位置づけの理由について調査したものである。

ア　大、中、小規模校とも共通して校務運営の円滑化をはかるためという理由で高い数値（３６.２％）がでている。校務運営の円滑化の内容面については、それぞれの学校の事情により異なると思うが、なんといっても校務がスムーズに運営され教育の効果が期待されるならば、学級外教員の役割は大きいといえる。

イ　第２の理由としては、教授組織に教科担任制をとるため（３０.３％）があげられている。子どもの学習効果を高めるためにも、また、学級担任の負担を軽減し効率的な学習指導をす

表３.　学級外教員の位置づけの理由　　実数　（％）

＼規　模　別	大	中	小	計
①教授法に一部教科担任制をとるため	4（44.4）	19（44.2）	34.（25.0）	57（30.3）
②職員構成上から便宜的に	1（11.1）	1（ 2.3）	8（ 5.9）	10（ 5.3）
③学級担任の事務量と授業時数を軽減し、研修時間の確保のため	0	3（ 6.9）	21（15.4）	24（12.8）
④教師の特性を考慮して	1（11.1）	2（ 4.7）	14（10.2）	17（ 9.0）
⑤校務運営の円滑化をはかるため	3（33.3）	16（37.2）	49（36.0）	68（36.2）
⑥授業時数完全確保のため	0	1（ 2.3）	2（ 1.5）	3（ 1.5）
⑦学校の重点目標を達成するため	0	1（ 2.3）	5（ 3.7）	6（ 3.2）
⑧その他	0	0	3（ 2.2）	3（ 1.5）

るためにも教授組織の改善がさけばれている今日、学校自体としても強くその必要性を感じている結果といえよう。とくに小規模校よりも、大規模校が４４％台と高い数値がでている。これは学級外教員の人数も学級担任の教員数も多いので、容易にできるからであろう。

ウ　教員の特性を考えて９％、学校の重点目標を達成するため３.２％と低い数値がでていることは問題といえよう。教員ひとりひとりの特性を考えてその教師が充実感をもって勤務できるようにすることは、学校経営上大切なことである。しかし教員ひとりひとりの個性を生かすということは実際面ではなかなか困難なことでもある。学級担任をがらり替えるということもできないし、職場の人員構成にもよることで、経営者として頭の痛いところである。また、学校の重点目標達成のためということも、学級外教員のみが努力したところで到底達成できないことであり、全職員が重点目標達成にいかに努力し合うかということに起因するからである。

エ　「学級担任の事務量と授業時数を軽減し、研修時間の確保のため」が小規模校で１５.４％という数値がでていることは、小規模校には事務職員も配置されていない学校もあるし、その上職員数も少ないので、教員ひとりの負担する校務の量も多いことから当然と考えられる。

(5)　学級外教員選定の方法と条件

学級外教員の位置づけは学校経営上教育効率の面で重要な問題である。それでは学級外教員を決める場合どんな方法で決めているか。また、学校長として教員のどんな点を考慮して選定しているかについて調査してみた。それが表４、５である。

ア　校長自身の考えで決選定しているのはわずか１６.５％にすぎない。教頭もしくは２～３人の職員の意見を参考にしているのが７１.２％と圧倒的に多い。図５でもわかるように学級外教員

表４.　学級外教員の選定方法について　　実数　（％）

①　校長自身の考えで決める。	31（16.5）
②　教頭もしくは２～３人の職員の意見をきいて決める。	134（71.2）
③　職員全体の意見を聞いてその後で決める。	13（ 7.0）
④　その他	10（ 5.3）

表５.　学級外教員を決める場合どんな点を考慮して決めるか　　実数　（％）

①　本人の健康面から	5（ 2.7）
②　本人の得意教科の面から	38（20.2）
③　学級担任よりも適任と思われるから	38（20.2）
④　校内のリーダーとして適任だから	87（46.2）
⑤　高年齢で他の職員よりも経験が豊かであるから	11（ 5.9）
⑥　その他	9（ 4.8）

をやってみたいという希望は殆んどいないので、全職員の意見をきいて選定するということはむずかしい現状のようである。

イ　その他の意見として

a　全員からアンケートをとる。

b　運営委員会で原案を作り、職員会で了承してもらう。

ウ　学校長として学級外職員を選定する際の条件は、校内のリーダーとして指導力もあり人間的にも他の教員から信頼される教員４６.２％というところに力点がおかれている。つぎに教員の特性を生かすという意味から本人の得意教科の順を重視している（２０.２％）。教員の充実感や教科担任制実施とからんで重要なことである。

エ　学級担任よりも適任だから２０.２％ということは、学級外教員の職務内容にもよるが、ここでは、学級担任としてよりも学級外教員の方が本人には向いていると解したい。

オ　図１からもわかるように、高年齢で経験も豊かだから学級外教員に向くというようには考えられていないようだ。

カ　学級担任教師の健康状態が子どもの学習活動におよぼすえいきょうは大きいので、健康上学級担任として不適当だと思われる教員もいる。従って学級外教員を選定する際、健康上学級担任として不向きな教員を学級外教員とする場合も考えられる。表５で「本人の健康上から」はわずかに２.７％と低い数値である。これは、健康上問題のある教員がいないということか。それとも職員の健康面まで考慮する余裕がないということであろうか。

キ　その他（４.８％）の内容は

①　分校出張授業に適した教員であること。

② 町の理科センター主事になっているから。

③ 教育長の意見を参考にする。

④ 教務主任として教委より指示があるから。

⑤ どの学年でも指導できるから。

⑥ 校務運営上もっとも支障のないように。

⑦ 事務的な手腕があるから。

⑧ 前任校を参考にして。

⑨ 学校運営上のバランスを考えて。

⑩ 指導力を考えて。

⑪ 高年齢で学級担任に不適だから。

2. 学級外教員の充実感について

(1) 校長は学級外教員の充実感についてどう評価しているか。

学校長としては、学級外教員を決める場合、教員が充実感をもって勤務できるように、校内のリーダーとして適任な教員を選んだり、本人の得意教科を重視したりして選んでいる。そして、その職務も、主任や教科担任としての位置づけをして十分配慮している。しかし、職員構成の面や、学校運営の円滑化の面で必ずしも本人の希望どおりになっているとは限らない。したがって、学級外教員のすべてが充実感をもって勤務しているとはいえないのでないか。そこで、自分の学校の学級外教員の充実感について校長なりにどう評価しているか１８８名の学校長から回答してもらった。表６がその結果である。約９０％の校長は自分の学校の学級外教員は充実感をもって勤務していると回答している。そして約１０％の校長だけは充実感をもっていないようであると

表6. 学校長は学級外教員の充実感についてどう評価しているか。 実数（％）

①充実感をもって勤務しているように思う。	169（89.9）
②充実感がうすいような勤務ぶりである。	3（ 1.6）
③どちらともいえない。	13（ 6.9）
④その他	3（ 1.6）

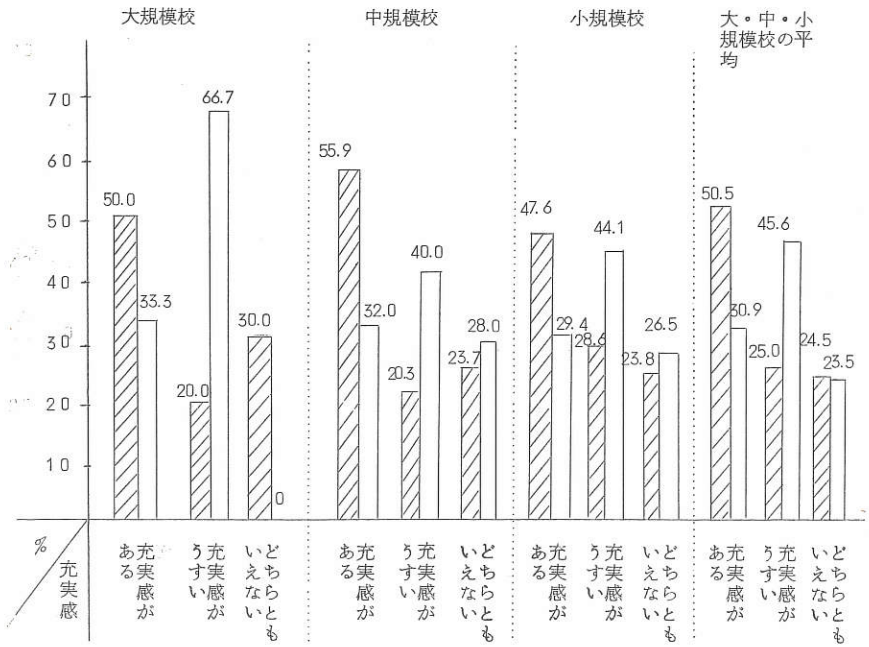
いっている。したがって、学級外教員の９割が充実感をもって、それぞれの職務に従事していると学校長は評価している。

(2) 学級外教員自身の充実感はどうか。

学級外教員の職務は学級担任と比較して学校全般にわたるので事務的な面での多忙さがあるのでないか。その上、学級という城がないために子どもとの接触も少なく、生活が平板で事務的に流れ易いことから、あまり充実感をもっていないのでないかと考えられる。学校長は約９０％の学級外教員は充実感をもっているというのに対して学級外教員自身の充実感はどうであるか。

ア 図２から、学級外教員の充実感は大・中・小規模校平均して４５.２％と半数以下である。学校長は学級外教員の表面的な観察しかしていないということもあるので若干の差異は認められようが、あまりにも大きな開きがあるということは、学校経営上問題といわざるをえない。

図２. 学級外教員自身の充実感について （規模別） 男 女



イ 男子教員の充実感５０.５％に対して、女子教員の充実感が約３１％と低い。男子教員は教務主任やその他の主任格となり校内のリーダーとして活躍しているので充実感ももっと高いのでないかと考えられているが結果的には約半数の男子教員も充実感がうすいと回答している。これは職務の内容に問題があるのではないかと推察できる。

ウ 大、中、小と規模別に比較しても大体同じ傾向を示しているが、とくに大規模校の女子の学級外教員の充実感はうすいという結果がでている。女子教員の職務上の位置づけに問題があるのか。それとも女子教員自身の 意欲 の問題かは今後の課題として残るにしても、女子教員の多い小学校の現状からして経営上考慮する必要がある。

エ 職務による学級外教員の充実感について

a 男子の学級外教員１８４名について考慮すると、教務主任という重要なポストについている教員で充実感があると回答しているのが５５.０％にすぎない。教務主任以外の職務については４０.０％となお低くなっている。教務主任という職務は男子教員にとって、教務主任・教頭・校長と未来性に通ずるひとつのステップである。それで好むと好まざるとにかかわらず経験しなければならない職務であるので、もっとも充実感をもって勤務しな

表7.　職務による学級外教員の充実感について（男子）　　実数（％）

職務／項目	教務主任	教務主任の職務以外	教務主任以外の職務の内訳										
			研究主任	教科主任	図書主任	視聴覚主任	教科担任	補欠要員	渉外係	事務補助	保健主事	給食主任	その他
①充実感がある	71 (55.0)	22 (40.0)	2	6	0	2	8	1	0	0	1	0	2
②充実感がうすい	31 (24.0)	15 (27.3)	4	2	0	0	0	4	0	0	3	1	1
③どちらともいえない	27 (21.0)	18 (32.7)	1	4	0	0	10	0	0	1	1	0	1

表8.　職務による学級外教員の充実感について（女子）　　実数（％）

職務／項目	A給食主任	B教科担任	A・B以外の職務	A・B以外の職務の内訳									
				研究主任	教科主任	図書主任	視聴覚主任	補欠要員	渉外係	事務補助	教務主任	保健主事	その他
①充実感がある	8 (33.3)	8 (34.8)	5 (23.8)	0	2	1	0	1	0	0	1	0	0
②充実感がうすい	10 (41.7)	12 (52.2)	9 (42.9)	0	3	0	1	3	0	1	1	0	0
③どちらともいえない	6 (25.0)	3 (13.0)	7 (33.3)	2	0	0	0	3	0	1	1	1	0

ければならない筈だと思われるが、意外に充実感がうすいというのは教務主任という職務性からくるものなのか今後の課題として吟味の必要があるのではないか。

b　女子の学級外教員68名について調査してみると、女子の主な職務は給食主任と教科担任が多い。この職務についての充実感は両方とも35.0％弱である。そしてこれ以外の職務に従事している学級外教員の充実感は23.8％とまた一段と低くなっている。女子教員の場合男子教員に比べて教頭とか校長への未来性が展けていない。また男子教員のように校内のリーダーとしての活躍場面も割合に少ないという外に、女性としての消極性から職務遂行上にも問題があるのではなかろうか。したがって充実感にもえいきょうしているのでないかと思われる。

(3)　年齢別の充実感について

ア　図3は学級外教員の年齢別の充実感についてのものである。39歳以下の教員では男女とも50％の数値である。この年齢層の学級外教員は殆んど教科担任の教員である。

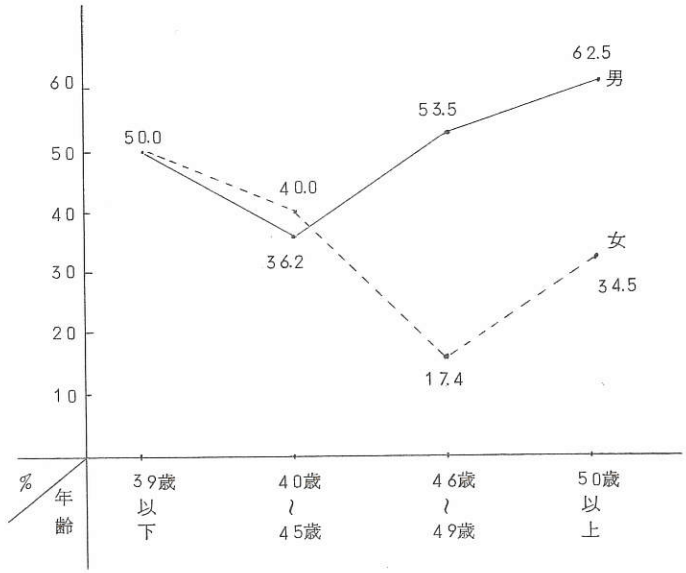
イ　40歳から45歳までの学級外教員では男女とも充実感がうすくなってきている。この年齢層は一部の教員は主任格であり、他の教員は教科担任という職務で教員によって職務がちがっ

ているからであろう。

ウ　46歳から49歳までの教員では男女差によって充実感がかなり差がでてきている。男子教員の殆んどが教務主任とか他の主任格に位置づけられ校内のリーダーとして活躍しているのに対して女子教員は男子教員のような位置づけでなく教科担任として自分のあまり得意でない教科を担当させられていることからか17.4％と一段と低い数値がでている。

エ　50歳以上の教員では、男子教員の充実感が62.5％と高くなってきているのに対して女子教員は34.5％と低い。しかし46歳から49歳までの女子教員の充実感17.4％に対して約2倍の上昇を示していることは職務の位置づけからの原因だけでなく教員自身の年齢的な人生観の相違や職場内の人間関係にも起因しているのでないかと思われる。

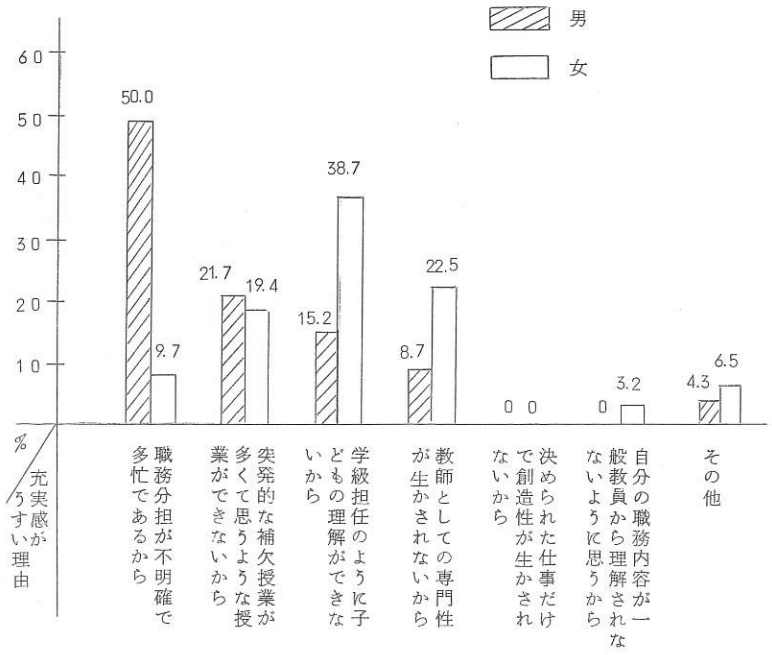
図3.　年齢別による充実感について



(4) 学級外教員の充実感がうすい理由

学校経営上その学校の教員ひとりひとりが毎日の教育活動の中で、充実感と生きがいをもって子どもの教育に従事してもらうことが教育の効果を高めるのに最も大切なことである。とくに小学校においては、学級担任教師のえいきょうはすぐ子どもの学習効果となって表われてくる。そして、学校という組織体の中では、ひとり担任教師の活動だけでなく、より重要なことは学級外

図4. 学級外教員の充実感がうすい理由



教員の教育活動が学校全体の歯車をより円滑に回転させる上で重要な役割といえる。これらの学級外教員が毎日の教育活動で充実感をもって従事できるように配慮してやることが経営者として大切な任務である。これまでの調査の結果からは学級外教員の充実感は、経営者としての校長の立場からみた充実感と学級外教員自身の充実感との差が、あまりにも開きすぎていることは、どこに原因があるか。学級外教員の充実感がうすい理由についての調査結果が図4からうかがわれる。

ア 男子教員で充実感がうすいという第1の理由は、「職務分担が不明確で多忙であるから」50%があげられている。表7の結果でもわかるように充実感がうすいと回答している男子46名の内訳は教務主任が31名でその他の主任が10名。4名が補欠要員、その他が1名となっている。従って、主任格の半数近い教員が職務分担が不明確で多忙だから充実感がうすい

と答えている。職務分担についてはどの学校も校務分掌で明示していると思うので、業務遂行上に問題がないのか。あるいは多忙すぎるためなのか。この点についての調査ができていないので今後の問題として残るようだ。ただ、主任格として学級外教員になっておれば、校長や教頭が不在の時、分担以外の業務も負担しなければならないだろうし、学級担任よりも職員室にいる時間も多いことから学校全体に関係した突発的な校務の処理などもあるので多忙すぎるということも考えられる。

イ 第2の理由として、「突発的な補欠授業が多くて思うような授業ができないから」21.7%となっている。学級外教員の殆んどがなんらかの形で時間割に組まれている正規の授業を担当している。その外に学級担任が休暇や出張研修等で留守になったときの補欠授業も担当しなければならない。従って、正規に組まれている授業の教材研究もできないばかりか補欠授業まで満足な授業ができないので心の安定が保たれないので充実感がうすいのだとも考えられる。

ウ 「教師としての専門性が生かされないから」と回答しているのが補欠要員の4名である。当然といえよう。

エ 女子教員の第1の理由は「学級担任のように子どもの理解ができないから」38.7%である。女子教員31名の内訳でいうと教科担任の12名全員がこのことについて回答している。女子教員にとっては学級担任としての生きがいが教師の本命と思っているように考えられる。

オ 給食主任10名のうち7名(22.5%)が「教師としての専門性が生かされないから」3名(9.7%)が「職務分担が不明確で多忙であるから」と回答している。給食主任の職務については、どこの学校でも問題視している現状から今後の課題として残したい。

カ 「突発的な補欠授業があって思うような授業ができないから」6名(19.4%)は主任格と補欠要員の回答である。

キ その他の意見として

① 学級担任でないからというので仕事をおしつけられるから。(男)

② はじめての経験なので立場に安定感がないから。(男)

③ 学級担任のように児童と密接なつながりがないから。(女)

④ 子どもとの接触の時間はあっても仕事に追われたり、来客のために無為に時間がすぎてしまうのがつらい。(女)

ク 以上の考察から学級外教員の充実感がうすい理由としていえることは

① 職務分担はきめられているが、つぎからつぎと雑用的な仕事がふえて、毎日が多忙すぎる。そのために心に安定感がないため充実感がうすい。

② 突発的な補欠授業が多くて一貫した授業計画がたたないため、子どもの教育上不安が残るので充実感がうすい。

(5) 学級外教員はどんなとき充実感を味わうことができるか。

ア 表9から男子教員と女子教員とのちがいがここでも明らかにでているように思われる。学級外教員の職務を決めるとき考慮すべき点であろう。

イ 男子教員でもっとも高い数値が表われているのは「仕事の中で自分の計画性や創造性が生か

されたとき」４５.６％。そのつぎが「自分の得意な授業をしているとき」２９.１％となっている。人はだれでも自分の可能性を信じ、思う存分活躍してみたいという意欲をもっている。その意欲を十分に発揮できるような職務を与えてやるべきであろう。ただ職務だけではなく、職場としてそれを認め合えるようなふん囲気をつくってやることも大切である。たとえば主任として計画したことが、その計画どおり実現されるようにみんなが協力的に援助してやるという職場のモラールが高まっていなければならない。「自分の得意な授業をしているとき」これは教師としての専門性が生かされることであるので当然といえよう。

表9.　学級外教員はどんなとき充実感を味わうことができるか。　　実数（％）

	男	女	計
①自分の得意な授業をしているとき	53（29.1）	25（36.2）	78（31.1）
②仕事の中で自分の計画性や創造性が生かされたとき	83（45.6）	18（26.1）	101（40.2）
③校内のリーダーとして活動できたとき	23（12.6）	2（ 2.9）	25（ 9.9）
④子どもの教育問題についてみんなと話し合いができるとき	7（ 3.8）	5（ 7.2）	12（ 4.8）
⑤自分のやっている仕事が子どもの教育に役立っていると理解されたとき	15（ 8.2）	16（23.2）	31（12.3）
⑥その他	1（ 0.5）	3（ 4.3）	4（ 1.6）

ウ　「校内のリーダーとして活動できたとき」１２.６％と低い数値である。校内のリーダーとして活動できるときは男子教員にとって、もっとも充実感を味わえるときでないかと考えられるが、学級外教員の充実感の調査結果でも指摘されているとおり主任格として充実感がうすいということと相通ずるものがある。現在の男子教員には、主任格とか指導者格になることを嫌いとしているのか、それとも教師自身に気迫がないのか、職場内の人間関係に問題があるのかが今後の課題といえる。

エ　女子教員にとってもっとも充実感が味わえるのは「自分の得意な教科の授業をしているとき」３６.２％が第１位。「仕事の中で自分の計画性や創造性が生かされたとき」２６.１％と第２位である。第３位として「自分のやっている仕事が子どもの教育に役立っていると理解されたとき」２３.２％と男子教員よりも一段高い数値がでている。この点は男子教員との相違点であろう。学級外教員は直接学級を担任していないために、自分のやっている仕事が果たして子どもの教育に役立っているのだろうかと不安感が先に立つ。それに、学級担任が学級外教員の仕事に対していささか「気楽な稼業でいいだろうな」と思っているのでないか。という女子教員独得な意識がはたらいているとも思われるし、職場内のモラールとも関係があるように思える。表９の①と②は教師の専門性の問題であるので学級外教員が充実感を味わうことができるのも教師としての専門性が生かされるときだといえる。

(6)　学級外教員と充実感とのかかわりあい（面接調査から）

ア　Ｔ校の女子の学級外教員の話（中規模校、教科担任）

４月当初学級外教員の希望をとったが、ひとりの希望者もなかった。校長は学級数外教員が加配されているので、どうしても学級外教員を選定しなければならないので職員会で相談した。しかし、あれやこれやで難行した。それでも決まらないのでとうとう女教員の最高年齢者におねがいするということになり、校長からも同僚からもおがみたおされて、しかたなく学級外教員を引き受けることになった。考えてみれば、停年退職まであとわずかに残された教員生活の中で学級の子どもと別れ、子どもの親たちと縁を絶たれるということは教員にとってこれほど淋しいことはありません。学級外教員を引き受けるときは泣き泣き引き受けました。同僚からも慰められました。学校経営の立場からだれかが引き受けなければならないので仕方なく引き受け、現在教科担任の仕事をしているが、充実感など全然ありません。貧乏くじだと思ってあきらめていますという話でした。

イ　Ｙ校の男子の学級外教員（小規模校　教務主任）

教頭よりも年齢が多い。教務主任をやりながら教科担任、その外に地区の理科センター主事の仕事もやり、学級担任が休んだり出張したりした場合は補欠授業にも出る。１週間の授業時数は３０時間を超える場合もあるという。教頭も教頭会の幹事をしているので教頭の仕事も時々やらなければならない。毎日毎日が多忙の連続であるという。教員としての充実感はというと、毎日忙しすぎていやになるときもありますが、校長や教頭も自分のやっている仕事を認めてくれ時々いたわりの言葉をかけてくださいますので張り合いがあります。それに教科担任している学級の子どもとも仲よくなり、校内はもちろん、町の中でも言葉をかけられると生きがいを感じます。といっていた。校長の話によると、この教員は地味であるが誠実でほんとうに立派な教員ですとべたほめでした。更にこの教員は、こういう難儀な仕事はだれかがやらなければ学校運営はなりたたなくなるのです。与えられた職務と思うと生きがいをもってやらざるをえません。と、いっていた。

ウ　Ｋ校の女子の学級外教員（大規模校　教科担任）

若い女子教員であったが学級外教員としての充実感について尋ねてみたら、即座に毎日が楽しいと答えてくれた。学級外教員になっているが学年所属になっていて、職員室の机の位置も教頭や教務主任のそばでなく、学年の先生方と机を並べているので、いつも学年の仕事は学年の先生方とやりますし、子どものことについての話し合いもみんなと同じようにやれます。その上自分のすわっている場所は先生方が集り易い場所に机が位置しているので、だれとでも話し合いができます。自分の得意な教科を担当しているので指導面でも張り合いがあるし、子どもからも好かれています。それで学級外教員としての悩みなどありません。毎日が楽しい充実した生活ですと答えていた。後で校長室で話をきいたところ、学年所属したこと、机の位置を考慮したことなどは、学級外教員の立場を考えてやったことだということであった。

更に校長が言われたことは、学級外教員選定の条件としていろいろあるが、なんといっても同僚からも好かれ、子どもからも好かれる人柄の教員でなければならない。と。

エ　Ｏ校の男子の学級外教員（小規模校　教務主任）

職務分担が不明確で多忙すぎ、充実感がうすいという結果がでているので、職務分担が不明

確だという点について問うてみた。教務主任の仕事というのは複雑多岐で学校全般の仕事が教務主任の仕事だといっていた。教頭の仕事、教務主任の仕事、研究主任の仕事というように仕事の内容は校務分掌である程度明記されている。しかし実際に仕事を進めていく場合には、ここまでが教頭の仕事でこれ以後は教務主任の仕事だというように一線を画すことはできないのが事実です。お互いに関連性があって重複している場合が多い。成文の面では明確化されるが仕事の内容によっては明確化しようとしてもできない面がある。この点は企業における職務分担と教育活動における職務分担とのちがいでないだろうか。教務主任には教務関係の仕事だけでなく、どの分担にも入らない雑用的な仕事が突発的にふえてくる。それに正規に組まれている授業にもでなければならない。学級担任が休めば補欠授業にもというように、すべての面に気を配っていて、急を要する仕事があればそれを処理しなければならないというように目まぐるしく忙しいので充実感どころでない。毎日毎日が仕事に追いまくられているのが現実である。仕事に追いまくられていることがあるいは充実感なのかも知れません。教頭が病気などで休んだりしても、教頭の仕事もちゃんとやっていけるということは、いろいろな仕事を手がけているからだと思います。と、いたってたんたんとした回答であった。

オ　S校の校長の話（中規模校）

学級外教員の充実感は、その教員の職務内容や学校としての位置づけにも関係あるが、それればかりではない。その教員のモラールにも大きく関係する。自分に与えられた職務をその教員がどのように受けとめ、積極的にどのように対処していくかという気構えにもよる。それに学級担任も学級外教員も子どもの教育活動に対する意識を同一にして、お互いの持ち場持ち場を認め合い協力的であるならば、その職場で働くことが楽しいものになる筈だと思う。教師ひとりひとりがもっと学校経営に積極的に参加しようとする意欲が大切なのだ。反面、学級外教員の立場というものを経営者側である校長、教頭が理解し、励まし、いたわりの気持ちで指導助言してやれば、学級外教員の職務も楽しいものになり、希望者もふえてくると思う。特に女子の学級外教員に対しては、女子教員同志の協力扶助の雰囲気を醸成するように配慮していくことが大切なように思われる。

3. 学級外教員と他の教員とのかかわりあい

学級外教員の充実感は、学級外教員個人の職務上の問題やモラールだけでなく、学級外教員をとりまく他の教員との人間関係にも深いかかわり合いがあるのでないかと考えられる。そこで学級外教員と他の教員との人間関係について調査したかったのであるが、露骨な調査項目で調査することをひかえ、ごく平板的な調査になってしまった。不備な点については面接調査で補い、まとめとした。

(1)　学級担任は学級外教員をどうみているか。

ア　表１０から、「校務が多くてたいへんだ」とみているのが３４.５％。「教師の特性が生かされないのでものたりないと思う」が２１.７％と計５６％以上が学級外教員の立場に同情的であるのに対して、「学級担任でないので気楽だと思う」９.２％。「授業時数をもっと多く担当し

表１０　学級担任は学級外教員をどうみているか。　実数（％）

	男	女	計
①学級担任でないので気楽だと思う	10（ 8.1）	13（10.3）	23（ 9.2）
②校務が多くてたいへんだと思う	43（35.0）	43（34.1）	86（34.5）	
③授業時数をもっと多く担当してもらいたい	11（ 9.0）	20（15.9）	31（12.4）
④主任としての仕事はたいへんだがやりがいがあると思う	24（19.5）	16（12.7）	40（16.0）
⑤特性が生かされないのでものたりないと思う	26（21.1）	28（22.2）	54（21.7）
⑥一般教員側に立って連絡を密にしてもらいたい	5（ 4.0）	5（ 4.0）	10（ 4.0）
⑦その他	4（ 3.3）	1（ 0.8）	5（ 2.0）

てもらいたい」１２.４％、計２１.６％が学級外教員の苦しい立場に立たずに批判的なみかたをしている。

イ　「主任として仕事はたいへんだがやりがいがあると思う」が１６.０％と低い数値であるが、学級外教員の充実感を指摘している。しかし、女子教員（１２.７％）に対して男子教員（１９.５％）の方が主任という職務に魅力を感じているように思う。

ウ　「授業時数をもっと多く担当してもらいたい」と考えている教員の中で女子教員が多いことは、学級外教員に対する女子教員の感情的な面がうかがわれるような気がする。

エ　「一般教員側に立って連絡を密にしてもらいたい」男女ともわずか４％と低い数値からみても、学級担任教員と学級外教員との関係はさほど問題がないといってよいのではないか。

オ　その他の意見として

①　教員本来の仕事以外の仕事をしているようだ。事務屋ではないはずだ。（男）

②　担当する子どもがいないので淋しいと思う。（女）

③　教科担任なので、必ずしも得意な教科を担当しているのでないからたいへんだ。（女）

④　職務内容をはっきりする必要がある。学級外教員にしわよせがいっている。（女）

⑤　補欠要員みたいでたいへんだ。（男）

(2)　学級外教員になってみたいと思うか。

学級担任教員は学級外教員の仕事は多忙でたいへんだと同情的で、あまり非難しているような点は少ないように思われる。なかには学級外教員の仕事はたいへんだがやりがいがあるのでないかと魅力をもっている教員もいるが、予想としては学級外教員をやってみたいという教員は少ないのでないかということで調査を実施してみた。その結果が表１１である。

表１１　学級外教員になってみたいか　実数（％）

		大	中	小	計	総　計
ア．思う	男	5（38.5）	15（38.5）	28（39.4）	48（39.0）	55（22.0）
	女	1（ 6.2）	4（ 9.0）	2（ 2.9）	7（ 5.5）	
イ．思わない	男	8（61.5）	24（61.5）	43（60.6）	75（61.0）	195（78.0）
	女	15（93.8）	40（91.0）	65（97.1）	120（94.5）	

ア　大・中・小と学校規模によらず同じ傾向が表われている。学級外教員になりたくないというのが圧倒的に多い。とくに女子教員の場合は約９５％が学級外教員になりたくないと回答している。それに比べて男子教員の約４０％が学級外教員をやってみたいと答えている。これは、学級外教員の職務上の位置づけと、教員自身の意欲に関係があるようだ。

表１２.　学級外教員をやってみたい理由　　実数（％）

	男	女	計
①学級担任でないので気楽だから	3（ 6.3）	0	3（ 5.4）
②自分の得意な教科が担当できるから	14（29.1）	4（57.1）	18（32.7）
③校内のリーダーとして活躍できるから	8（16.7）	0	8（14.5）
④より多くの子どもと接することができるから	5（10.4）	0	5（ 9.1）
⑤いろいろな仕事の勉強ができるから	12（25.0）	1（14.3）	13（23.6）
⑥教育についての視野が広くなるから	6（12.5）	2（28.6）	8（14.5）
⑦その他	0	0	0

イ　学級外教員をやってみたいという５５名（男４８名、女７名）の教員の理由は表１２のとおりである。男子教員では「自分の得意な教科の担当ができるから」２９.１％と「より多くの子どもと接することができる」１０.４％と計約４０％が教師の専門性を生かすことができるのでという理由のようである。「校内のリーダーとして活躍できるから」１６.７％、「いろいろな仕事の勉強ができるから」２５.％、「教育についての視野が広くなるから」１２.５％、計５４.２％と男子教員らしい視野に立っての理由のようにうかがわれる。

表１３.　学級外教員をやってみたくない理由　　実数（％）

	男	女	計
①校務が多くてたいへんだから	5（ 6.7）	13（10.9）	18（ 9.2）
②教師の専門性が生かされないから	36（48.0）	43（35.8）	79（40.5）
③子ども理解ができないから	12（16.0）	26（21.7）	38（19.5）
④補欠授業が多くて一貫した授業ができないから	16（21.3）	19（15.8）	35（17.9）
⑤自分に得意教科がないから	3（ 4.0）	14（11.7）	17（ 8.7）
⑥一般教員から孤立するきらいがあるから	1（ 1.3）	3（ 2.5）	4（ 2.1）
⑦その他	2（ 2.7）	2（ 1.7）	4（ 2.1）

ウ　女子教員では学級外教員をやってみたいという教員はわずかに若い教員の７名だけである。その理由も「自分の得意な教科が担当できるから」５７.１％、「教育的広い視野に立っていろいろな勉強ができるから」４２.９％である。若い女子教員らしい理由である。

エ　学級外教員をやってみたくないという１９５名（男７５名、女１２０名）の理由では、「教

師の専門性が生かされないから」４０.５％、その中でも男子教員は４８.０％、女子教員は３５.８％と男子教員の方が教師の専門性を重くみているといえる。「補欠授業が多くて一貫した授業ができないから」１７.９％、「子ども理解ができないから」１９.５％、計３７.４％と教師にとっては子どもとのつながりが本命であり、子どもとの接触なくして教師の生きがいがないのだということであろう。

オ　「校務が多くてたいへんだから」「自分に得意教科がないから」の理由はあまり大きな理由にはなっていないようである。「一般教員から孤立するから」2.１％とほんのわずかの数値で、ここでも一般教員と学級外教員との人間関係がうまくいっていないという推測はあたらないといえよう。

カ　学級外教員をやってみたくないというその他の意見

①　自分の学級を経営したいから

②　位置づけが不明確だから

③　雑務引受所になりたくないから

④　学級の子どもと多くふれあう機会がないから

(3)　学級外教員の一般教員に対する要望

学級外教員は一般教員側からみれば、管理者側に立っているのでないか。学級外教員はたいした仕事をやっていないでないかと見られることも予想できる。そんな点から学級外教員の立場として一般教員に対する要望は何かについて調査した。その結果が表１４である。

表１４.　学級外教員の他の教員に対する要望　　実数（％）

	男	女	計
①気楽に話し合える時間がほしい	85（46.9）	23（33.8）	108（43.4）
②子どもについての話し合いや、連絡を密にしてほしい	32（17.7）	21（30.9）	53（26.3）
③特別な見方をしないで同じ仲間としてつき合ってほしい	11（ 6.1）	4（ 5.9）	15（ 6.0）
④学級外の気持ちになって理解や協力がほしい	31（17.1）	12（17.6）	43（17.3）
⑤別に何もない	18（10.0）	7（10.3）	25（10.0）
⑥その他	4（ 2.2）	1（ 1.5）	5（ 2.0）

ア　「特別な見方をしないで同じ仲間としてつき合ってほしい」この調査項目は一般教員が学級外教員を管理者側的な見方をしているのではないかという予想のもとでの発問であったが、6.0％と意外に低い数値である。「学級外教員の気持ちになって理解や協力がほしい」１７.３％と低い結果である。「別に何もない」１０％、これらのことから学級外教員と一般教員との関係は大した問題がないといえる。

イ　「気楽に話し合える時間がほしい」４３.４％ともっとも高い数値である。男子教員の要望が女子教員の要望とくらべて高い数値であるのは、男子教員は教務主任等の職務についている関係からとくに強く感じているのだと思われる。「子どもについての話し合いや、連絡を密にし

てほしい」が２１．３％ここでは女子教員の方が高い数値である。女子教員の大部分が教科担任をしているので担当学級の子どもの様子などについて理解を深めたい気持ちからであろう。一般教員も学級外教員もお互いに多忙すぎるため、ゆっくり話し合う時間的な余裕がないためであろう。学級外教員の孤独さがうかがわれるような気がする。

ウ　面接調査の結果では、学級外教員自身はあまり充実感こそないが、職場内の人間関係はスムーズにいっていると淡々とした気持ちがうかがわれた。

エ　その他の意見として、学級外教員になりたいという教員はいないが、学級外教員がいるからこそ、気軽に年休をとることができるのではないか……。というのがあった。

(4)　学級外教員の学校長に対する要望

ア　「教師としての特性が生かされるような位置づけに」３１．８％。男女別では女子教員の要望が男子教員の２倍の５０％と高い数値であるのは、女子教員の大部分が教科担任としての位置づけになっているが、教科担任教師は必ずしも自分の得意な教科を担当しているとはいえないことからとも考えられる。

表１５.　学級外教員の学校長に対する要望　　実数（％）

	男	女	計
①事務量をへらして授業時数をもっと多くして	17（10.4）	6（10.0）	23（10.3）
②職務内容をもっと明確にしてもらいたい	63（38.7）	13（21.7）	76（34.1）
③補欠授業だけでなく、教科担任としての位置づけを	5（ 3.1）	4（ 6.7）	9（ 4.0）
④持ち時数をへらして主任として活やくできるように	20（12.2）	6（10.0）	26（11.7）
⑤教師としての特性が生かされるような位置づけに	41（25.2）	30（50.0）	71（31.8）
⑥その他	17（10.4）	1（ 1.7）	18（ 8.1）

イ　「職務内容をもっと明確にして」という要望が３４．１％　学級外教員の充実感がうすい理由としても同じように高い数値がでている。雑用的な仕事を負わされ、多忙すぎて、教師としての本務が果たせないということであろう。現在、校務と称して純然たる校務と、雑用的な校務とが入り乱れている。学校経営上もっとすっきりと精選しない限り、教育効率の面でマイナスになるような気がする。教育経営全般について見直す時機であるように思う。

ウ　「事務量をへらして授業時数をもっと多くして」１０．３％学級外教員の中には、教科担任として位置づけされているが、学級外教員だからというので事務引受係のようにされていることから、授業時数をふやしてもらい授業に専念したいという気持ちであろう。「持ち時数をへらして主任としての活やくができるように」１１．７％　小規模校の教務主任は、教科担任補欠授業とあまりにも授業時数が多すぎる。学級担任と同数の授業時数を持っていては教務主任としての仕事は十分に果たせないということである。

エ　その他の意見

①　突発的な補欠授業が多くて一貫性のある仕事ができなくて困る。（男）

②　教育理念や指導力についての教頭・校長の指導助言がほしい。（男）

③　計画性や創造性をより多く採用するような職場でありたい。（男）

④　自主的に雑用を引きうけ、学級担任が完全授業できるようにしているので、その気持ちをくんでもらいたい。（男）

⑤　校長・教頭も補欠授業に積極的に出てもらいたい。（女）

学級外教員が学校長に対する要望の中で、その他の意見として、「教頭・校長の指導助言がほしい」「計画性や創造性をより多く採用するような職場でありたい」等々の要望がでているが、これは少数の限られた教員の意見だとは考えたくない。現在の学校で教頭や校長が部下職員に対してどれだけ指導助言しているか疑問だからである。また、学校経営にしてもその校長の創造性や個性が生かされた個性ある学校経営が余り見られないようにも感じられるからである。校長や教頭に部下職員を育てていくという積極的な指導的助言がないと部下職員にも意欲が出てこないと思う。部下職員が、校長・教頭を信頼できるということは、校長なり教頭が、ほんとうに部下職員のことを考え、自分たちを育てようとしているのだと思えたとき信頼感もでてきて、経営にも積極的に参加しようとする意欲がわいてくるのだと思う。

(5)　ま　と　め

ア　学級外教員をとりまく他の教員との人間関係についてつかもうと調査を試みたのであったが、調査項目の不備から明確につかめなかった。この点について面接調査を実施したが、やはり職場内のことであるので、真実の声はきかれなかった。あたりさわりのない回答しか得られなかった。

イ　全体的なムードとしては職場内の人間関係は予想したほど問題はないようである。お互いに多忙な毎日を送っているため、これが現実の姿なのだろうとなかば諦めムード的なところがあるように感じられた。ただ、学級外教員にはなりたくないという気持ちは強いようだった。そのなりたくない学級外教員を引き受けてくれている教員に対していろいろ注文をつけることは気の毒だというのが真意のようである。

ウ　学級外教員に対する学級担任教員の卒直な声を拾ってみた。全体的なムードとしては別に問題はないようであるが、個々にはつぎのような考えを持っている教員も一部にいることを経営に当たつて考慮していかなければならないのではないかと思われる。

①　管理職的な錯覚をおこさないこと。

②　教科担任の殻にとじこもることのないようにしてほしい。

③　学級外教員即教務主任・教頭の次ぎというイメージを変えてほしい。

④　分掌事務にだけとじこもることなく担任との連けいがほしい。

⑤　校内のリーダーとして人間的魅力のある人でほしい。

⑥　人間関係がうまくいくような方が学級外教員にふさわしい人だ。

⑦　教科担任としての研修をつんでもらいたい。

⑧　中立的な立場で管理職と一般教員のパイプ役になってほしい。

⑨　一般教員のよき相談相手になってほしい。

4. 望ましい学級外教員の位置づけについて

これまでの調査結果からいえることは大要としてつぎのようなことがらである。

① 学校としての位置づけの実態は、男子教員の場合は主任格としての位置づけが最も多く、女子教員の場合は教科担任としての位置づけが多い。

② 位置づけの理由としては、学校運営の円滑化のために主任格の位置づけをし、教授組織の上で教科担任制をとるため教科担任としての位置づけを考えている。

③ 学級外教員の充実感は、男女とも充実感がうすい。とくに女子教員の充実感は男子教員に比べてうすい。充実感のうすい理由は、職務内容がすっきりしていないからと、教師としての専門性が生かされていないことからである。

④ 他の教員との人間関係は、表面的には別に問題がないといえる。

望ましい学級外教員の位置づけはどうあればよいか。結論的なことはここで述べることはできないにしても、校長・学級担任・学級外教員の三者からのアンケートをもとにして、さらに考察を加えてみたい。

(1) 学級外教員がいることにより学校経営上どんな利点があるか。

学級外教員がいることにより学校経営上どんな利点があるか経営の責任者である校長より回答してもらった。その結果が表１６である。

表１６. 学級外教員がいることにより、学校経営上どんな利点があるか。 実数（％）

	大	中	小	計
①校務運営が円滑にいくようになった	5（55.5）	25（58.1）	90（65.7）	120（63.5）
②学級担任の事務量や授業時数が軽減され余裕がでてきた	0	7（16.2）	22（16.1）	29（15.3）
③研修活動が活発化した	0	0	5（ 3.6）	5（ 2.6）
④教科担任制が実施できて教師も児童も生き生きしてきた。	3（33.3）	8（18.6）	8（ 5.8）	19（10.1）
⑤授業時数が確保できるようになった	0	2（ 4.7）	7（ 5.1）	9（ 4.7）
⑥教師の特性が十分生かされてきた	1（11.1）	0	3（ 2.2）	4（ 2.1）
⑦その他	0	1（ 2.3）	2（ 1.5）	3（ 1.6）

ア「校務運営が円滑にいくようになった」６３.５％で学校が小規模校ほどその数値が高い。職員数の少ない小規模校にひとりでも教員数が増になるということは、いかに学校運営上プラスになっているか明らかである。校務運営が円滑化したということは、内容的にはどんな事かはっきりしていないが、校務組織の面で、教務主任の位置づけや主任級の位置づけがはっきりして校務運営がスムーズになったということであろう。

イ 中・小規模校が「学級担任の事務量や授業時数が軽減され余裕がでてきた」１６％台の数値がでていることも「授業時数が確保できるようになった」約５％も教科担任制による効果であるように考えられる。

ウ 大・中・小規模校同じように「教科担任制が実施でき教師も児童も生き生きしてきた」という効果がでている。とくに大規模校ほど数値が高いのは、学級外教員の数も多いことから教科担任制が容易であるということになる。

エ 小規模校ほど多面的に利点がでていることは、小人数で学校運営するには、多方面にわたってしわよせがきているということである。学級外教員の役割がそれだけ大きなえいきょう力があるともいえる。

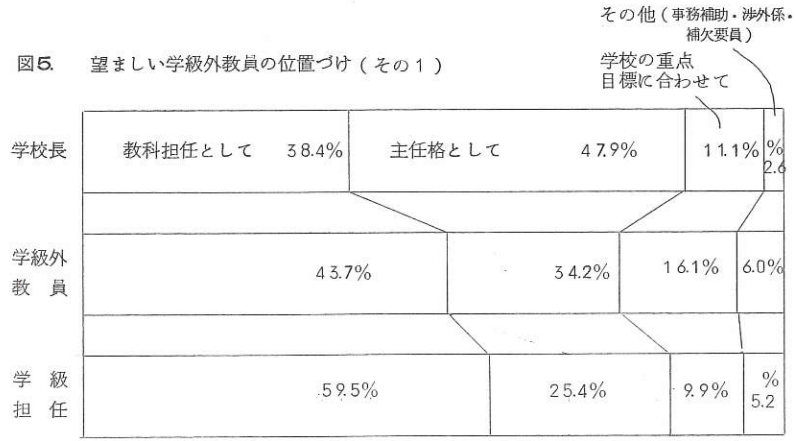
(2) 望ましい学級外教員の位置づけについての調査結果

ア 図５は学校長・学級外教員・学級担任の三者からのアンケートの集計結果である。学校長の意見は「主任格として」の位置づけが４７.９％と第１位。「教科担任として」３８.４％が第２位、つぎが「学校の重点目標に合わせて」１１.１％となっている。校務運営機構の中に主任格として位置づけ、学校運営の円滑化ということに重点がおかれているのだと考えられる。

イ 学級外教員と学級担任の意見は数値の差こそあるが「教科担任として」の位置づけが第１位で、「主任格として」の位置づけが第２位で学校長の意見と食い違いがでている。とくに学級担任は「教科担任として」の位置づけを約６０％と半数以上の教員が望んでいることに注目したい。学級外教員も、学級担任も教師の専門性を重視し、教師の本命は子どもとの対決であると望んでいるようだ。また、教授組織に一部教科担任制を実施し、学級担任の授業負担を軽減し教材研究の時間的な余裕をもたせることにより、子どもの学習効果が期待できるのだと教育効果の面を第一義的に考えている。

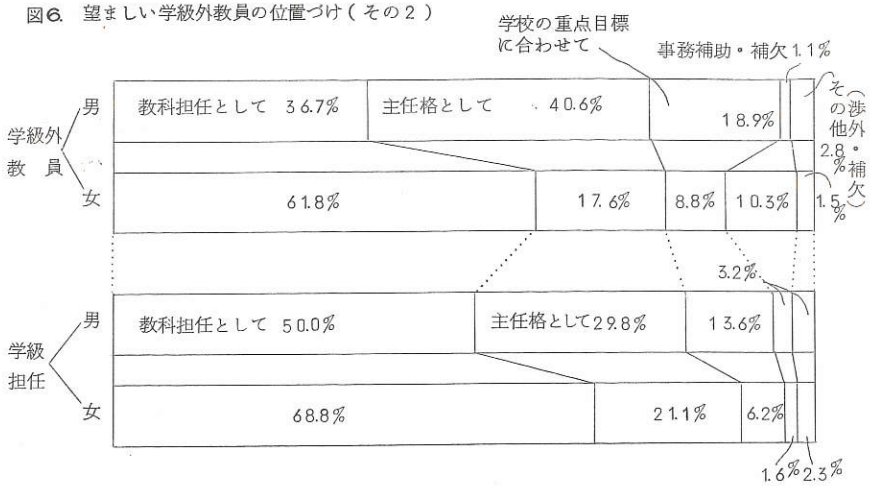
ウ また、学級外教員は「学校の重点目標に合わせて」１６.１％と学校長や学級担任のそれより

図５. 望ましい学級外教員の位置づけ（その１）



も高い数値であることや、「主任格として」の位置づけが学級担任よりも高い数値がでていることは、自分自身が実際に学級外教員を経験してみての意見であるとすれば、その数値は尊重したいものである。

図6. 望ましい学級外教員の位置づけ（その２）



エ　学級外教員も学級担任も、男子教員の方が女子教員に比較して、「主任格として」の位置づけと「学校の重点目標に合わせて」の位置づけの数値が一段と高いことが図６からうかがえる。逆に、女子教員は男子教員より「教科担任として」の位置づけが望ましい位置づけであるとはるかに高い数値がでている。このことから男子教員は学校経営という広い視野に立って学級外教員の位置づけを考えているということで経営参加の意識が女子教員よりも高いといえるのではないか。つまり、学校教育の効率化は、授業オンリーだけでなく、よい授業をすることを前面にかかげながら、そのよい授業ができるような組織体制がなくては実の効果は期待できないのだとする考え方であろう。

それに対し、女子教員は、「主任格として」「学校の重点目標に合わせて」の位置づけも大切ではあるが、まず「教科担任として」の位置づけをし、学級担任の不得意な教科の指導を補ってもらうことが先決であるという考え方のようだ。

オ　その他の意見

a　学校長より

- 教務主任は学級外教員として校務運営を円滑にしたい。
- 教科担任制をとりたくても適当な学級外教員に恵まれないのでできない。
- 教科担任制をやりたくても人事異動に左右される。
- 学級・学年の副担任的な位置づけがよい。

b　学級外教員より

- だれでもが学級外教員をやってみたいという職務内容にしてもらいたい。
- 専科教員的な存在が適当だと思う。
- 教員の特性を生かすため教科担任制を加味する必要がある。
- 教授システムの研究を深めるためにも専科教員としての位置づけが大切である。

c　学級担任より

- 学級担任の授業時数を軽減するような位置づけをしてほしい。
- 教科担任として授業を多くもつようにしてもらいたい。
- 主任格として位置づけても教科担任制が加味できるようにしてもらいたい。
- 教育効果向上の立場から一部教科担任制ができるようにすべきだ。
- 音楽・体育・理科・家庭は専科教員が望ましいので学級外として位置づけ、授業時数の軽減をはかり、教育効果が高まるようにすべきだ。

カ　学校長との面接調査から

a　位置づけの条件としてつぎの点が要約される。（優先順位）

① 教育効果を高めるという立場から
② 教授組織の改善という立場から
③ 校務運営を円滑化するという立場から
④ 学級外教員の充実感を尊重するという立場から

b　学級外教員を決める際の問題点

① 希望者がいないので苦労する。
② 限られた職員構成の中で決めなければならないという点で問題がある。
③ 人間関係を考慮して決める必要がある。
④ 学級担任を毎年毎年替えるということができないので、適材が選ばれない。
⑤ 充実感のことも考えているが、そればかりも考えられない。
⑥ 向き、不向きがある。
⑦ 人事異動に左右される。

以上は実態調査の結果であるが、他の側面からも合わせて考慮してみたい。

(3)　小規模校の立場から

分校をもっていない６学級以下の小規模校では、学級外教員はもちろん事務職員も養護教諭もいないので、学級担任が年休で休んだり、研修等で出張した場合、教頭も校長も授業を分担しなければならない。教頭・校長も学級担任が不在の時いつも補欠授業に出られるとは限らない。学校運営上校長には校長としての仕事が、教頭には教頭としての仕事がある。教頭も校長も授業に出られない場合は、その学級は自習か欠課にならざるをえない。このことは子どもの学習上重大な問題である。

山形県小学校長会で昭和４７年度に、ある６学級の小規模校を対象に、１年間に担任教師が出張、研修や休暇等で授業をおこなわなかった時数を調査した結果が表１７である。これによると３５９時間という莫大な数になる。これを１学級平均でみると６０時間つまり１学級につき１週間に 1.7時間の欠時間となる。これが６学級となれば１０.２時間、１週間に１０時間以上が毎週学級担任が直接授業をおこなわなかった時間になる。この時間を埋め合わせるには教頭か校長が授業に出なければ、どこかの学級が留守になるわけである。小規模校にも学級外教員がおればこの分の授業を補充できるだけでなく、教科担任として他の学級の授業も担当できることから、学

表 17. 担任が授業をおこなわなかった時数

（山形県小学校長会昭和４７年度調査）

種別＼曜日	月	火	水	木	金	土	計	１学級平均	１週平均
出張・研修等によるもの	16	76	29	76	56	1	254	42	1.2
休暇によるもの	19	20	26	17	12	11	105	18	0.5
計	35	96	55	93	68	12	359	60	1.7
年間の１週平均	1.0	2.7	1.6	2.7	1.9	0.3	10.3		

級担任に時間的な余裕ができ、教材研究の時間も校務の処理の時間もとれるようになるばかりでなく質の高い授業ができるようになる。従って子どもの学習効果もあがることになる。

(4) 教授組織改善についての意見から

望ましい学級外教員の位置づけの実態から教科担任としての位置づけについて高い数値がでているが、昭和４７年度に山形県教育研究所が調査した教授組織改善についての意見からも学級外教員の位置づけについての一考察ができる。

ア 教授組織を改善する上で障害となっていることは表１８でもはっきりするとおり「教員数が少ないのでできない」３９.８％と阻害上最大の要因となっている。ついで「いそがしくて教材研究の時間がとれない」３６.８％と第2番目の要因としてあげられている。いそがしいということは教員数の不足から余裕時間がとれないと考えられる。つまり各学校に学級外教員が配置されれば、学級担任の授業時数も事務量も軽減され時間的な余裕がでてきて教材研究の時間もとれるようになる。それに学級外教員が教科担任としての位置づけがされるならば、教授組織の改善も容易にでき、子どもの教育効果も向上するようになると考えられる。

表 18. 教授組織を改善する上で障害になっていること （％）

①学校の中で教師間の意志統一がむずかしい	3.0
②教師の考えが学級王国にかたまっていて協調性がない	1.0
③教担制やＴ・Ｔ方式などについて教師の関心が低い	7.5
④教員数が少ないので協力しようとしてもできない	39.8
⑤教具や機器類が不備なので効果があがらない	11.9
⑥いそがしくて教材研究の時間を確保することがむずかしい	36.8

イ 学級担任制の改善についての意識の調査の結果では、「他の教師にうけもってもらったほうがよい」と考えている教師は８４.８％と圧倒的に高い数値がでている。そして自分の学級は自分だけでという完全学級担任制の立場はわずか６.３％にすぎない。このような賛否は低学年担任の場合と高学年担任の場合によってちがってくると考えられるが、教師の意識の中には教科担任制により授業をすすめていく方向に傾いていることは自然のなりゆきのように思われる。

したがって学級外教員に教科担任としての教員がいることにより容易に教科担任制の実施にふみきることができるのでないか。

ウ 「学級担任制を改めるべきである」とする理由に「１人の教師の指導力の限界」がうかがわれる。教科内容が質的にも量的にも高まり広がってきているのに、教師の仕事は多忙になる一方で、授業全部を１人の力でこなすことの困難な現状にある。専科教員が学級外教員として各学級に出向いてその教師の不得意な教科の指導をしてやることにより、学級の子どもの学習効果も一段と向上するのだと考えられる。

表 19. 自分の学級の授業の一部を他の教師にうけもってもらうことについて （％）

①うけもってもらうほうがよい	84.8
②うけもってもらわないほうがよい	6.3
③どちらともいえない	8.9

表 20. 「学級担任制を改めるべきである」とする理由 （％）

①１人の教師が全教科を担当するのは困難だから	43.1
②学級担任のちがいによって学級間に差が生ずるから	5.1
③学級の児童数が少なすぎて効果があがらないから	5.1
④複式学級がふえるなど学習指導がむずかしいから	8.8
⑤教材研究の時間が思うようにとれないから	35.7
⑥その他	2.2

(5) 望ましい学級外教員の職務内容はどうあればよいか。

ア 学級外教員が学校にいることにより学校運営が円滑になり、さまざまな点にその利点があらわれていることは事実である。しかし、学級外教員の職務内容をどのように位置づけすれば尚ベターな学校経営ができ教育効果も挙がるようになるか十分検討して決定すべきである。

イ 学校長との面接調査の結果からいわれることは、第１に児童の教育効果を高めるという立場から決めるべきである。第２には教授組織を改善するという立場から決めるべきである。第３には校務運営を円滑化するという立場から、さらに第４には学級外教員の充実感を尊重するという立場から決めるべきだとしている。第１の立場と第２の立場は表現面での差はあるが意味内容面では同じであると考えてよいのではなかろうか。つまり児童の教育効果を高めるために教授組織を改善する方向で決めるべきであると解してもいいのだと思う。

ウ 望ましい学級外教員の職務の位置づけについてのアンケートによれば、第１位には「主任格として」の位置づけが４７.９％。第２位には「教科担任として」３８.４％となっている。結果的には、「主任格として位置づけ校務運営を円滑化する立場」が第１と考えられている。しかし、学校長の「その他の意見」の中にもいわれているように、教科担任制をとりたくても適当な教員に恵まれないので、できないのが悩みであると告白している。ほんとうのところ学級外教

員を教科担任として位置づけたいと考えているが、職員の構成などの事情からそれができないために、便宜的に主任格として位置づけ合わせて教科担任もしてもらうという方法をとっているのでないかと推測できる。従って、学級担任教員や学級外教員と同一意見で学級外教員の位置づけは教科担任として位置づけすることに校長自身も望ましいと考えているのではなかろうか。

エ　学級担任教員や、学級外教員からのアンケートの結果だけでなく、教授組織改善に対する調査結果からも明らかなように教科担任として位置づけ、学級担任の授業時数を少しでも軽減しその余裕時間で教材研究や学級事務の処理ができるようにしてやる。さらに、得意な教科の指導を多くの学級に奉仕してやれる。学級の子どもは、より多くの教師より指導をうけることにより、学習面で活気がでてくるだけでなく、人間形成の面でも大きな影響をうけることになる。このことは、校務運営を円滑化するだけでなく、教育効果の向上に発展することにもなる。

オ　教科担任としての位置づけであれば、自分の得意な教科の指導ができ専門性が生かされることになる。学級担任をしなくとも毎日各学級の子どもと接することができるので教師の生きがいにもつながり、教育活動に対する情熱も湧いてくるであろうし心配される学級外教員の充実感の問題も解消されることになる。

カ　学級外教員の位置づけが教科担任として望ましいというものの、職員の構成上からどうしてもできない場合も考えられる。また、学校のさまざまな事情から教科担任としての位置づけよりも、教務主任とか研究主任としての位置づけをした方がより効果的である場合も考えられることから、一概に教科担任としての位置づけが最適であるとはいいきれない。したがって、その学校のおかれている実情からして、学級外教員の職務内容をどのように位置づけすることがよりベターな学校経営ができ教育的効率につながるかをその学校の職員の意見などを参考にして、学校長の責任において決定すべきであろう。

例えば、学級外教員１名の場合の学校では、教務主任として位置づけ教科担任も兼ねるという方法で、この場合、担当授業時数をどの位にするかは十分検討してやらないと職能を十分に発揮できないことになる。

学級外教員２名以上の学校では、１名を教務主任として位置づけ、他の教員は教科担任にして、教科担任制を実施する方法もある。この場合、教務主任もできるだけ教科担任できるようにすべきである。

また、学級外教員を全員教科担任として位置づけ、教務主任は学級担任の中から決めるのもよい。この場合教務主任で学級を担任している教員の授業時数をできるだけ軽減してやり、教務主任としての職務が果たせるように配慮してやることが大切である。このような方法をとっている学校が県内にはかなりあるが、こうした学校の教務主任の話をきいてみると、学級担任をしている関係からか過重な仕事の分担がなされないため却って仕事がやり易いということをいっている。

キ　学級外教員の職務を決める場合問題になることは、学級担任が休んだり、出張等で欠になる場合の補欠授業のことである。補欠授業が学級外教員の職務の一部になってしまうと、折角教

科担任として位置づけられていても突発的な補欠授業にかりだされてしまい各学級に配当されている教科担任の授業計画が成り立たなくなる。それに学級外だからという理由からさまざまな用件を頼まれる。そしてつぎつぎと仕事の量が増加する結果になり、学級外教員の職務がだんだんと不明確になり充実感がうすくなってくるということになりかねない。

県内の学校の中には、（１学年２学級以上で組織されている学校）学級担任が事情により欠になる場合の補欠授業はその学年で補充することを建て前として、学級外教員は教科担任としての職務を十分果たせるようにしている学校もある。学級外教員は雑用引受所という感じを与えているために学級外教員を希望する教員が少ない結果にもなっているので、学級外教員の職務が魅力的で充実感をもってその職務に従事できるような配慮を経営の責任者である校長はすべきである。

V　む　す　び

1. 学校教育の効率化

学校経営の在り方はあくまで「学校教育的効率を目ざし、計画し、組織・指示・調整・統制するなどの基本的」創意機能としてとらえるならば、学校の所与の条件をどのように駆使することがより学校教育的効率を高めることができるかという視点に立って学校経営を考えていくべきである。学校運営が円滑になるようにとねがうのは学校長として当然といえよう。しかし、学校運営の円滑化が必ずしも教育効果の向上とは結びつかないこともある。教育効果を高めるための手段として学校運営の円滑化を図るということになるのでないか。学校の教育的効率化ということは直接子どもの学習が主体になる。子どもの学習が質の高いものであるとき学校教育の効果も高まってくるのだと思う。

現在、公立小学校に、学校規模に応じて学級数外教員を配置しているのも各学校のかかえている種々の悪条件を克服して、その学校の教育効果があがるようにという配慮からである。従って学級外教員の配置されている学校において、学級外教員の職務をどのように位置づけることがその学校の教育的効果をより高めることになるのかを考え、学級外教員の望ましい職務をそれぞれの学校経営方針にもとづいて決定すべきであろう。

これまでの調査結果からは、①教師自身の専門性を生かす方向で、②教授組織を改善し、教育能率を高めるために機能分担ということで、教科担任として位置づけすることが望ましいとされている。だが、学校の実情によっては、教科担任としての位置づけよりも、他の職務として位置づけした方が、その学校にとって教育の効率化が期待できるとするならば、教科担任としての位置づけにこだわることなく、あくまでも学校教育の効率化を目ざす方向で学級外教員の職務内容を決定することが大切であろう。

2. 学級外教員の充実感

調査の結果から、学級外教員を希望する教員がひじょうに少ないという結果がでており、その理由も、職務内容がはっきりしていないこと、教師の専門性が生かされていないこと、雑用的な仕事が多くて忙しい等々の理由から学級外教員としての充実感がうすいということが挙げられている。

学校経営にあたって、その職場に勤務するひとりひとりが毎日の生活の中で自分の仕事に対して情熱を傾け、生きがいをもって勤務できるような組織体制をつくってやることは誠に重要なことである。個々を尊重し個々を生かすことは経営の能率化・効率化の根本である。しかしながら職員の構成メンバーの上から、また人事異動の面等を考えた場合、事実上なかなか容易なことではない。とくに小学校においては、校長・教頭を除いた一般の教員は、それぞれの学級を担任し学級経営に自らの情熱を傾け子ども等とともに生きがいを感じようとしているのが現実の姿であるように思う。学級担任からみれば学級外教員それ自体が魅力のない存在である。学級外教員の

職務はもっと魅力のある、そして充実感のもてる職務であってほしいという要望があるように、教師としての専門性が生かされ、充実感のある魅力的な職務内容に位置づけする必要があるのでないか。とくに女子教員は男子教員に比べて学級外教員に魅力をもっていない。現在の小学校の職員構成は女子教員が過半数を占めている。それに年齢的にも老齢化してきている。学校経営上からも女子教員の処遇についていろいろな問題がとりざたされている現状から、この点の配慮についても十分検討されなければならないであろう。

つぎに、学級外教員の職務に充実感がうすく、魅力のない存在だといわれている理由の一つとして、雑用的な仕事が多くて忙しいといわれている。これは職務内容を明確化するだけで解決できるものではないように思う。雑用的な仕事があればこれは誰かがやらなければならない。学級外教員にまわってくるのは当然といえる。従ってこれら雑用的な仕事をもっと学校経営全体の立場から整理する必要があるのではなかろうか。現在の校務の中には雑用的な仕事がかなりあるのではないか。学校の中の仕事はみな校務だといえばそれまでだが、よく考えてみると、これが果たして教育的な価値のある仕事かと首をかしげざるを得ないような仕事も事実ある。教育的でより価値ある仕事を精進し組織化する必要があるように思う。学級外教員は雑用引受所といった感じをなくし、充実感をもって職務遂行できるような魅力ある職務にしたいものである。

3. 反省と残された問題

(1) 反　省

ア　学校規模による考察は、校数の不揃いからその数値も客観的数値として取り扱うには無理であったのでないか。とくに大規模校の場合の数値に問題があったように思う。従って、規模別に考察したところと、そうでないところがあったりしたことは調査としてはまずい結果であったように思う。

イ　学級外教員の職務内容の調査では、個人毎の担当分掌を全部記入していただいたが、担当分掌名だけでは、職務の難易度や軽重がはっきりしないばかりか集計も困難であったので主な職務名で考察した。この点についても吟味がたりなかったのでないかと反省している。

ウ　学級外教員と他の教員との人間関係についてもつっこんだ調査をしたかったのであるが、具体的な調査では却って支障があるのでないかという懸念から表面的な調査になってしまった。

エ　学級担任についての調査は、年齢的な配慮をした上で調査を依頼すれば、学級外教員に対する見方も違った面がでてくるのでなかったかと思われる。

(2) 残された問題

ア　学級外教員の充実感だけについて考察してきたが、学級担任の充実感も調査し、これとの比較の上でどんな点に問題があるのかを明らかにする必要がある。

イ　教務主任とか校内のリーダーになっている学級外教員の充実感がうすいということは、どこに原因があるのか、この点についてのくわしい調査をして、経営上の問題点を明らかにする必要がある。

ウ　学級外教員の充実感がうすいということは、現在の教員全体に通ずるような気がする。現在

の学校教員は果たして自分の職務に対して充実感をもって勤務しているだろうか。疑問である。教師のモラールの問題として考えていきたい。教師のモラールを高めるために、学校経営の責任者である校長がどのように取り組んでいるのか、校長の指導性とからみ合わせて明らかにしていく必要がある。

参考文献

吉本二郎編	学校論（組織・経営・管理）	明治図書
山形県教育研究所	小規模学校における教授組織に関する研究	
	学校運営研究　№159	明治図書
山形県教育委員会 山形県連合小学校長会	小学校教育課程の編成（第3集）	